
ホシノソラ

オシノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホシノソラ

【Nコード】

N1598Z

【作者名】

オシノ

【あらすじ】

駅前で道に迷った少女と出会う主人公。人の良い男は、良く知らない少女の道案内をすることになった。案内した少女は探偵、友人はこすぷれいやー。片田舎で起きる奇妙な事件。天才ではない――凡人である少女探偵による、チョット変った事件解決。

僕が大学に行こうとすると制服を着た少女が立っていた。

駅前には必ずある、周辺の地図が描かれた看板の前に。

大人びた容姿からしておそらく高校生、中学生という事はないはずだ。

黒い冬服のセーラー服に赤いスカーフ、そして同じ色のストッキング。

少女は、その前で何度も何度も首をかしげる。

道が解らないのだろう。

拳句の果てには、地図を様々な角度から見はじめた。

しゃがみこみ下から見上げたり。右から覗き込んだり、逆から見たり。

だが地図とは変面に描かれた絵であり、立体ではないので角度をいくら変えようが迷い人の行く先を示してくれることはない。

僕は少女のそんな様子を見かねて話しかけた。

「ねえ君、行きたいところあるの？」

「……………」

首をこちらに向けて回し、僕をジッと見つめる。

きれいな瞳だった。人形の顔にはめるために造られたガラス玉のように。

変な間があく。

話しかけたのは失敗だったかもしれない。

僕の勝手なおっせかいだったのだ。

それを感じた僕は、

「えーっと、余計なお世話だったかな」と言う。

だが彼女は「実は雨宮大学に行きたいのですけど」と目的の場所を僕に説明。

勘違いだったのだろうか。

「ああ、それだったら簡単だ。目の前にあるこの道をまっすぐ行けばいいよ」

「まっすぐですって……はあ？」

いぶかしげな顔で僕を見つめる。

「！？」

「……………」

「……………」

少女の顔は不細工ではなかった。

が、今の顔は見れたものではない。

口を歪ませ、眉間にしわを寄せ、左の眉をつり上げている。

ひと昔前のヤンキーのような顔、要は不細工な顔をしていた。

何だその顔は、何が気に入らないんだ。僕が嘘をついているとも言うのか。

親切で話しかけてあげたのにとんだ仕打ち。やはり、なれないことはするものではない。

しかし、一度乗りかかった船は簡単には降りられない。

「……ハハハ。良かったら案内しようか、僕の通ってる大学だし」
たぶん僕の顔は、すごく引きつっている。

それを聞いた少女は、

「あー、雨大の学生さんでしたか。これは失礼しました」

ニコツと笑って返答。

なんとなくだけど、閉じられたまぶたの奥の目は笑ってないような気がした。

作り物の笑顔。

たぶん気のせいだろうけど。

——雨大とは、僕の通ってる大学である雨宮大学の略である。

「ハハハ…」

なんで彼女はあんなしかめっ面をしたのだろっ、ナンパされなくても思ったのか。

女子高生に自己紹介をされた。

「私は雨宮星空と言います。天の星、空と書いてソラと読みます。ヨロシク」

「僕は鈴木だよ。よろしくね」

それを聞いた星空の顔が一瞬、また不機嫌なものになる。

「下の名前は？」

「えッ、なんで」

「教えて下さい。私は教えたのに不公平」

僕が名前を言わなかったのが気に入らなかったようだ。

あまり言いたくないからわざと名前を伏せたのに、なんて空気の読めないヤツ。

僕は自分の名前にあまり良い思い出がなかった。

「…聖夜」

聞こえるか聞こえないくらいの小さな声でボソツと言う。

「エッ？」

右耳に手を当てて、聞こえないと言ったジェスチャーをする少女。

「聖夜だよ！聖なる夜と書いてセイヤだッ！」

それを聞いた星空はニコツと笑い、

「いい名前ですね。ロマンチックです」と言ってくれた。

「そうかな。なんか照れるな」

僕の気にしすぎだったかもしれない。

この名前のせいで幼い時に少し苦労した。今思うとそんなに気にするようなことじゃなかったかもしれない。

けど無意識に名前の部分だけ伏せてしまう癖がある。

少し神経質になりすぎていたんだ。

褒められたらなんか気が楽になった気がする。

僕は、そのまま歩きながら話す。

そんな話をしていると、今度は少女に、

「そうだ。クイズしても良いですか？」

と聞かれた。

「ああ、別にかまわないよ」

何でいきなりクイズなんかするんだと思ったけど、まだ高校生の女の子だ。遊びたい年頃なんだろうと納得した。

星空は空気をスウと胸の奥まで吸い込む――

「では問題いきます。偉い人がラスベガスやマカオ、シンガポールで会社の金を使い込んだことが原因で、トイレットペーパーの芯が太くなり実質的な紙の量が減った（消費者の負担が増えた）会社と言えばエリエールですが、八十年代の少年漫画誌でギリシャ神話をモチーフとした、車田正美先生による傑作漫画の名前は、聖闘士ツ…何でしょうか？」

「……………」

僕はあっけに取られた。

そして、息もつかせぬ間に、

「プ————ッ。時間切れー。正解はセイヤでしたー。っーかなんですかその名前。田舎の売れないホストですか？オモシロすぎて、私ペガサス流星拳打てそうなんですけど！ププッ…アハハハハハ」

と言う。

「……アハハ、おもしろいですか…それは良かった。ところで問題にあったエリエールの話、聖闘士星矢と全く関係ないよね。それとエリエールは商品名であって会社名ではないよ」

ムカつく。

なんてムカつくガキだ。

が、

相手は高校生、まだ子供だ。落ち着いた対応をしないとイケない。大学生としてふさわしい大人としての行動を。

見せてやろう、これから社会人になる人間の知恵を。

示そう、人生の先輩としての模範を。

例えば、「高校生活は、楽しいかい？」とか「今日は大学見学に来たのかい？」とか聞けばいいんだよな。

それで間違いないよな。

まずはこんな質問でお茶を濁す。

「ところで君は何処の高校に通っているの？」

「フハハハ、アハハハハ——ッ。アハハハハハハ——ッ

！！」

「……」

全く聞いてねえ。

目の前にはアスファルトの路面に背中から転がり、腹を抱え大笑
いする少女。

ああ、これが腹を抱えて笑うってことなんだな。

そのもつともなる例を見た気がする。

さらに彼女は大笑いしながら、先程問題にもなった、不朽の名作
である少年漫画のオープニングを歌っていた。

アニメの主題歌を歌う行為を見て、相当馬鹿にされていることを
確信した。

どうやら気を使う必要はなかったらしい。

今日、僕は会ったばかりの女の子に自分の名前を大爆笑された。

なんて失礼なヤツだ。

「フヒー、フヒー、苦しい。マジで苦しい。ちょっと聖夜、あん
まり私を笑わせないで下さい」

「面白いことを言った記憶が全くないのだけれど……。っーかかい
きなり下の名前かよ」

「親しみを込めてです。私のことも星空でかまいませんよ」

「親しみって言うより悪意しか感じないぜ。星空」

雨宮商店街にて

まっすぐな道を歩く。

大学までの道。

駅前の商店街通りの名称である【雨宮通り】の看板が見える。

入り口に惣菜屋、店先でおばちゃんが品物を売っている。

コロッケ一つ百円、メンチは百二十円。

左に顔を向けると靴屋。赤地に黒で書かれた閉店セールのポスタ
ー。

僕が入学した時から閉店セール。

聞いた話だと十年以上前からやってるらしい。

きつと自分が卒業した後も閉店するするサギを行っていくのだろ
う。

後ろの方から、何か来る気配がしたので振り向くと、

——ビュッ！

「オワッ！？」

自転車に乗ったおばちゃんがすごい勢いで、僕の右腕のヒジギリ
ぎりの所を通り過ぎた。

とっさの反応で避けると、隣にいた星空にぶつかりそうになる。

「大丈夫だった？」と彼女に聞くと、首をコクコクと縦に振って
答える。

八百屋の兄ちゃん（黒人の若者）が「ヤスイヨー！ヤスイヨー！」

と声をあげ、

そこで主婦が夕食の材料を買う。

今は不景気だ。潰れる店も多い。大手チェーン店が幅を利かすこ
のご時勢に、ここまで活気がある商店街は珍しい。

一つ一つの店の規模は小さくても、

この商店街には、安くて品揃えの良い大きな会社に対抗できる力
があるのだろう。

そして、ここには全国にチェーン展開する喫茶店もある。
大きな会社と小さな個人店、この場所では共存もしているのだ。
ちやうどその喫茶店の前で星空が足を止めた。

「ちよつと疲れちゃいました」

「え？」

まだ、駅からほとんど歩いてないんだけど。

「このお店で、休憩して行きませんか？」
と聞かれた。

そう言われてみると、なんとなく顔色が悪いような…悪くないよ
うな

話してるだけだと明るい感じがするんだけど…表情が無いと言っ
か、目が笑ってないというか。

読めないヤツだ。

「あー、そうだね。調子悪いんじゃないね。じゃあ休んでい
こうか」

「はい、ご馳走様です！」

「!？」

（え——ッ。僕がおごるのかよ!？）

「では、中に入りましょう」

星空はそう言って軽い足取りで入店。

「……………」

僕は考えた。

まあ、相手は高校生だから年上である僕が代金を持つことは妥当
だ。

なんか腑に落ちないけど。仕方ない。

少し間をおいて僕が入店すると、星空はすでに注文を終えていた。

「もう、遅いですよ。じゃあ、先に行って席を取っておきますね」

「ごめんごめん。注文したらずぐ行くから」と言って僕はコーヒ

ーを頼んだ。

注文を聞いた若い女性の店員さんは元気な声で、

「ハイ！ありがとうございます。では合計で二千百四十円です」

「うわっ！？値段高ッ！？」

それを聞いた店員の笑顔が引きつる。

「いやそういった意味じゃなくて……もう一回確認してもらって良いですか？」

いぶかしげな顔で注文の内容を確認する。

「ええと、ホットミルクとホットドックのLサイズ、アイスコーヒーとシフォンケーキ、それとコーヒーで二千百四十円です」

——あの女。

どれだけ注文しているんだ。

「アハハ……」

僕はお金を払った。買った分の代金を払う。コレは社会のルールだ。

「ありがとうございますー」

この店の店員より、星空から聞きたい言葉である。

「こっちです。こっち！」

「……………」

「なんでしよう？」

「いやあ、君。いっぱい注文してくれたねえ」

「えへへ」

なぜ照れる。

「この食いしんぼさんめ
軽いいやみ。」

「あんまりほめないで下さいよ〜」
「まったくほめてねーし。」

「おいしい？」

「あー、イマイチ」

——ビキビキッ！

僕のこめかみに青筋が走る。

人にご馳走してもらっておいで、おいしいの一言も言えんのか最近の若い奴は！

自分も大した歳変らんけど。

「ところで星空。僕このままだと午後の授業に遅れちゃうのだけ
れど」

「へえー、それは大変ですね」

全く感情がこもっていなかった。

「急いで食べてもらっていいかな」

「いやです。食事はゆっくり味わって食べるものです」

「いいから、早く食べよ」

「人生急いでも何も良いことはありませんよ。急がば回れです」

「急がないと授業に遅れるんだよ！」

無理やり口に、食べてる途中のホットドックをつめこむ。

「何するんですか！？」

「食事時間、時間短縮のために手伝ってやってるんだ」

「無理無理、無理。こんな大きなソーセイジ食べられない」

「じゃあ、注文するんじゃない！」

「飲み物、飲み物！喉が詰まる」

「ほれ」

「熱ッ！？こんな熱くて、ドロドロしたミルク飲めません」

「ほれ、じゃあアイスコーヒー飲みなさい」

「はい」

「シフォンケーキは没収っ」と

「この盗人めッ！」

「もとは僕の金だ！」

——「お客様、店内ではお静かにお願いします」
店員の人に怒られた。

「すみません」二人声をそろえて謝る。

食べ終わるとトレイの上に食べ終わった食器を乗せ、星空と一緒に片付けた。

星空のお友達

ああ、完全に遅刻だ。この女のせいで。

授業の途中で教室に入っていったらヒンシユクものだろう。

だから今日は休みだ。

大学生で言うところの自主休講。勝手に授業を休むことにする。

商店街の端まで来ると、人通りも少なくなってきた。

通り出口の近くには、若者向けの洋服屋と小さい映画館がある。

その隣には、雑貨屋があり。

自転車に乗った小学生が集まってきていた。

商店街を出ると、住宅街だ。

左手にドブ川を見て、川沿いにずっと歩いていくと目的地の大学に着く。

星空はずっと話していた。

僕が質問する間も無いくらいずっと――

しばらく歩くと、大学の正門に着いた。

そこには、腕を組んだ女性が立っており、こちらに気づくと目線を送ってきた。

んん？その前に髪の色がおかしい。

――銀色だ。

外国の人？

そもそも、髪が銀色の人種なんかいたっけ。

そんなことを考えているうちに、銀髪の女性がこちらに来る。

僕には、あんな変な髪の色をした人間は知り合いにいなかったの

で、

「星空の知り合い？」と聞くと彼女はコクコクと頷いた。
知り合いらしい。

やがて銀髪女は、僕らの目の前に来ると、「遅かったじゃない。

星空」と話す。

「道に迷ってしまいました」

と星空はそれに答える

「またなの！？でも、それにしても遅かったじゃない、心配したのよ」

「そこに居る人と一緒にチョット休憩していました」

「休憩？何してたの」

「はい、大きいソーセージを無理やり食べさせられたり」

「！？」

「熱くてドロドロのミルクを急いで飲まされました」

「ちょッ！！？」

「すごく強引でした」

「キキキキキ、…鬼畜プレイ！！」

おかしい、表現の仕方が絶対におかしい。

この一連のやり取りを聞いていた僕は、

——「チョット、何言って…」

会話を止めようとしたが、

「この変態、鬼畜野郎がッ！」

間に合わなかった。

銀髪女がつかみかかって来たのだ。

「誤解だ！」と僕にかかった濡れ衣をはらそうとすると、

「言い訳してんじゃねえ！」と怒られた。

「してねえし！ていうかアンタ、この女子高生と知り合いなの？」

「はあ、女子高生？ 星空はこの大学の生徒よ！」

「え——ッ！？ 大学生かよこいつ！ ていうかなんで制服着てるんだよ！？」

「今はそんなこと、どうでも良いでしょ！」

「良くない！ そのせいで僕がご馳走するはめになったんだ！」

女子高生だと思っただからおこった。

僕だっってお金がないんだ、正直なところ見栄を張っていたんだ。だがそれを聞いた銀髪女の顔はますます鬼の形相になる。

「女子高生だから大きいソーセージと熱いミルクをご馳走してやっただけかッ！？ このロリコン女子高生マニアがッ！」

「ちよと待て！ あんたは誤解している。僕とあんたの考えているニュアンスが違うんだ」

「当たり前だ！ 変態の考えている事なんか解ってたまるか！」

——バキィ！

殴られた。

グーで。

「痛たたた……」

何でこんな仕打ちを受けないといけないんだ。

「立て！ 制服マニアの変態め！ 肅清してやる！」

「あわわ、どうしてこんな事に」

今日は厄日だ。

女子高生探偵

僕が一発殴られたところで、星空が銀髪女を止めてくれた。と言っても星空が原因なので止めて当然なのだが。

「いやー、ごめんね。なんか私、誤解してたみたいで」手を合わせて僕に謝ってきた。

「いえ、別に…」

僕はそっけない感じで返事を返す。

「言ってくれば良かったのに」

「……」

僕は、必死に説明していた。

解りやすかったかどうかは別として。

「ホントごめんねー」

「いえいえ、全然気にしてませんよ。ところでなんですかその髪の色。外人なの？」

「ああ、これね。私、レイヤーなの。コスプレする人ね」

「へえ」

そういえばこんな噂を聞いたことがある。

テレビや雑誌で取り上げられてる美人コスプレイヤーがこの大学にいるってことを。

コイツの事かもしれない。

「で今度コスプレするアニメのキャラが銀色の髪をしているの。」

本当はウィッグでも良かったんだけど、今回はチョットこだわって見たの！」

「へえ」

「あはは、でもチョット目立ちすぎちゃって困ってるんだ。変だよ、こんな色の髪」

「いや、スゲーカッコいいですよ」

「ホントに？」

「そのスクラップ三太夫のコスプレ」

「なんだと！誰が、頭が銀色のバケツでできているポンコツロボ
ットだ！」

「やるのか！」

まさに一触即発。

「だいたい、そんな普通の服、さえない顔、普通のスニーカー履
いてるダサい男に言われたくありません」

「普通の服を馬鹿にするな！貧乏大学生がそんなに良い服買える
か！」

「安い服でも、こーでいねーと次第だと思っけど」

「変な髪の色しているよりマシだ！」

「このヤロー！」

「まあまあ、落ち着いてください」

僕らのやり取りをみていた、星空が仲裁に入る。

「ちよつと、熱くなりすぎたな。申し訳ない」

僕が謝ると銀髪女も、「そうね、私も謝るわ」と言った。

「法学部一年の鈴木聖夜と言います。よろしく」

「英語学科のレインです。よろしくね」

「は？」

「レインです」

なんだその韓国の男性アイドル見たいな名前。

「本名ですか？」

「えっ、違うけど」

「本名を名乗れ」

「いやです。良いじゃないハンドルネームで、アンタの名前も似

たようなモノでしょ」

「僕の名前のセイやは、ハンドルネームでもペンネームでもない。本名だ！」

「うわー、細かい。キモいわ。どうでも良いじゃないそんなこと」

僕の目を見ていない、そっぽを向いて話している。ホントにどうでもいい感じた。

「本名とハンドルネームと一緒にすることは、細かい事じゃねえ」「へー、それはスミセンデシター」

棒読み

「くッ…」

このまま話していると、また掴み合いのケンカになりかねない。僕はいったん距離をとると、星空に話しかけた。

「クソッ！美人で性格がいい女なんて都市伝説だ。そんなもの少年漫画にしか出てこない」

「チョット待って下さい、そんなこと言ったら私も性格悪いってことですか？」

「自分のこと自分で美人って言うだけでも驚きなのに、お前が自分自身で性格良いと思っていることにドン引きだ」

「いやあ、辛口ですねえ」

「今日一日で人間不信になったよ」

「まあまあ」

「ところでアンタこの学校の生徒だったんだな」

「そうです。言ってますでしたっけ？」

「言ってねえよ。ていうか自分の通ってる大学までの行き方が解らなくなるのか。普通」

「方向音痴なんです」

駅からこの大学までは、一本道だ。ただ道が解らないんだ。

「あとなんでセーラー服を着てるんだよ、ここは大学だぜ？」

「これは制服です」

「いや、見れば解るけどそんなの」

学校の制服ってことだろ。

「ああ、失礼。そういうことではなく、仕事着ってことです」

「……………えっ？」

セーラー服が仕事着。

彼女が着ている制服は、パツと見良くてきた高そうな生地なので一般的な雑貨店で売っているようなモノには見えない。

お遊びのコスプレで使うようなペラペラな生地 of 安物ではないのだ。

おそらくどこかの学校指定のセーラー服だろう。

しかも、クラシックなデザインから、歴史の古いお嬢様が通うような学校のモノではないか。

大学生なのに学校指定の制服を着て仕事。如何わしい商売しか思いつかない。

女子高生○○。

まだあるのだろうか

援助交際

僕はなんとコメントすればいいのか。

ていうか聞かないほうが良かったんじゃないのか。

いやまて、結構軽い感じで話してきたから、そんなに重い話じゃないのかもしれない。

メイド喫茶ならぬ女子高生喫茶みたいな。

セーラー服で喫茶店のウェイトレスしてるんですう。みたいな。

聞いてみるか。でも変な雰囲気になるのはいやだ。

本人にだって言いたくないことがあるだろう。

そんなこと聞くのはどうだろうか。

「ちよつと、何想像してるんですか？」

「…いや、なんでも」

話を切り出しづれえ。

「何か如何わしいことを想像していませんか？」

「えっ、違うの？」

「違いますよー、私は探偵なんです」

「は？」

探偵が仕事って何？

なんで仕事着がセーラー服なの？

いろいろな疑問が僕の頭に浮かんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1598z/>

ホシノソラ

2011年12月6日02時53分発行